

St. Luke's International University Repository

ケアリングと看護実践の知

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-03-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野並, 葉子, Nonami, Yoko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.34414/00014923

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



ケアリングと看護実践の知

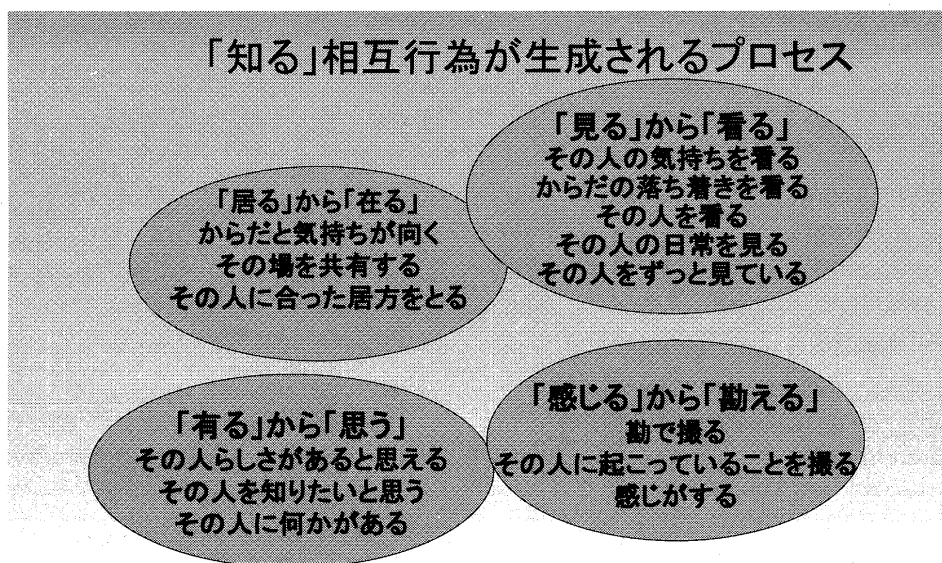
野 並 葉 子¹⁾

パトリシア・ベナー（1989）は、「ケアリングという言葉が有益なのは、ケアリングという言葉が思考と感情と行為を区別せず、人間の知の働きと存在を一体的に表現する言葉だからである」（p.1）と述べている。つまり、看護実践の知は、人の思考と感情と行為を一体に表現したものと捉えた。その実践的でより具体的な看護の知を明らかにするべく、私が担当する大学院修士課程成人看護（慢性）の専門看護師養成コースでは、具体的なケアリングの実践モデルをつくり、それを研究者が実践し、その実践の中から看護実践の知を引き出していくという方法で、研究を行っている。研究者は、研究テーマに関連する対象の理解や援助技術に関する知識、患者に起こるだろう反応、研究者の中に起こるだろう反応について準備し、それらを記述する努力をする。しかし、それでは研究者が看護実践の知を認識できないということがわかった。研究指導者が、研究者（実践者）の中に埋もれてしまった知を対話を通して引き出していくことで、研究者の語りの中で認識され、形を表していくことが明らかになった。

また、パトリシア・ベナー（1989）は、「人に援助を与える条件と、人からの援助を受け容れうる条件がケアリングによって設定される」（p.6）というように述べ

ている。ここで言う、人に援助を与える条件と人から援助を受け容れうる条件の根底となるものが、患者と看護師の間につくられる状況の中で、相互に Knowing（知ること）ではないだろうか。私が行ったケアリングの看護実践における「知る」相互行為が生成されるプロセスに関する研究では、「有る」から「思う」、「感じる」から「勘える」、「居る」から「在る」、「見る」から「看る」という「知る」行為が明らかになった。

「有る」から「思う」という知る相互行為では、[その人に何かがある]ことは看護師が患者に出会ったそのとき、その人の全体的な様子を捉え、看護師の患者に対する反応を意味していた。さらに[その人を知りたいと思う]ことがあったり、[その人らしさがあると思える]と、こういうふう看護をしたいというように看護師の意識が覚醒していくことを含んでいた。そうすると看護師の知ろうとしている行為が患者に伝わり、患者から反応が返ってくると、信頼されていることを看護師が実感できる。そうすると、看護師は患者との間に「親しみ易い」「関わり易い」「話し易い」「打ちとけ易い」「気持ちが出易い」といった状況がつくられ、「どンドンやり易くなる」というように状況が進展することを経験していた。これらの「知る」行為は、その看護師が獲得してい



1) 兵庫県立看護大学

る「その人を知る」技術であり、その看護師の人生の経験で獲得している実践知に関連していた。

「感じる」から「勘える」という「知る」相互行為で、看護師は何か視ている情報から反応が感じ取れると、そこに自分が反応して、感覚的・瞬間的に「感じ取る」行為が起こることを意味していた。つまり、看護師は看護師が感じ取れない、その患者にしかわからない、その人らしからぬ行動の変化を平面的ではない立体的な何かを撮るといように状況を切りとり、記憶していた。そこで看護師はその場面で記憶している過去に経験し「勘で撮った」相互行為と、今「勘で撮った」相互行為の違いについて勘が働き、頭で組み立てて看護行為としてイメージできるように「勘える」ことを行っていた。

「居る」から「在る」という知る相互行為で看護師は、「話をして側に居る」、「手を握ったり、さすったりして側に居る」「苦しいことを忘れられるような居方で側に居る」といったように様々な居方をとっていた。さらに看護師は、自分が聞きたいと思い、自分の中で確信すると、時と場を選んで勇気をだしてどう考えているか聴くことをしたり、こう考えていると話したりすることで、患者が喜ぶという反応や、看護師がうれしいという反応も伝わることを経験していた。看護師は「その人にあった居方をとる」ことや、「その時間と場を共有する」ことを、そこに自分が居るだけで患者が安心したり、患者が思い悩むことが軽減したり、癒されるということを経験していた。つまり看護師は、「からだと気持ちが向く」という相互行為を、患者の気持ちに添うような自分の居る場所と患者の思いを一緒に汲むような居方や気持ちが患者に向く姿勢を「在る」こととして経験していた。

「見る」から「看る」という「知る」相互行為は、看護師がその患者の日常の中に居て、その人の日常を「その人とその人の周りを見る」というように見ていることが患者に伝わり、患者がその状況に日常生活を現すことで、患者と看護師の相互に患者の日常の生活が分かってくことを意味していた。さらに看護師は「その人を見る」行為の経験を、目の前の「その人を看る」、[からだの落ちつきを看る]、[その人の気持ちを看る]行為として遣っていた。「看る」ということは、その人そのものや、患者の感情の波や、患者の身体の落ち着きや、患者の気持ちや、患者が発している信号を看るということを意味していた。「在る」、「看る」といった行為は、ケアリングの看護実践における特有の「知る」行為となっていた。

これらの看護ケアの実践における「知る」相互行為は、その看護師の対象に向かっていく行為となることによって、看護ケアの実践の軸となり、看護師と患者の相互にとって最も個人的な領域にあった。つまり、これらの「知る」行為は、その看護師が獲得しているその人を知る技術であり、それはすべての看護ケアの行為に貫かれていた。また、これらの「知る」行為は、その看護師の

人生の経験で持っている実践知に関連していて、個々の看護師によって違っていた。

引用文献

Benner, P., Wrubel, J.. 現象学的人間論と看護. 難波卓志訳, 医学書院, 1999